

# 山形・熊野田遺跡

- 1 所在地 山形県酒田市大字熊野田字高砂
- 2 調査期間 一九八八年(昭63)七月～八月
- 3 発掘機関 山形県教育委員会
- 4 調査担当者 齊藤主税
- 5 遺跡の種類 集落跡
- 6 遺跡の年代 九～一〇世紀
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要



(酒田)

熊野田遺跡は、酒田市街地の東方約5km、飽海平野と呼称される最上川以北の沖積平野部中央南部に位置している。本遺跡の北方五・五kmには平安時代出羽国府に擬定されている国指定史跡「城輪柵跡」が所在しており、これを中心に酒田市東部から八幡町にかけて平安時代の官衙跡や集落跡が数多く点在している。遺跡は、酒田北部三角洲に立地し、出羽山地より源を発

する新井田川左岸の水田地であり、標高四mを測る。

熊野田遺跡の調査は、一九八七年度県営圃場整備事業にともなう緊急発掘調査によって、南辺九五m、東辺四五m、西辺三八m、北辺六六mの長さに板材が直線で連なり、四方に囲まれた板材列を有する集落跡と確認された遺跡である。一九八八年度には、板材列で囲まれた中央部に県道生石・浜田線道路改良事業が行われることになり、緊急発掘調査を実施したものである。

二年にわたる調査の結果、板材列で囲まれた内部には、掘立柱建物跡一二棟、井戸跡一基、土壇四〇基、溝状遺構四六条の他、建物跡として組み合わせることができなかったピット等、多数の遺構を検出した。また東辺の板材列はほぼ中央部には、東西二間、南北一間の掘立柱建物が板材列をまたぐように確認され、本遺構の出入口施設と考えられる。検出された板材列と建物跡の軸方向はほぼ同一の傾きを測り、同時期に営まれた遺構としてとらえることが出来る。

遺物の出土量は多く、整理用コンテナに約一一〇箱ほど出土している。内容的には須恵器、赤焼土器が大半を占めており、緑釉陶器片、灰釉陶器片や輸入青磁片も若干含まれている。須恵器や赤焼土器には、漆および漆紙の付着したものが見受けられる。木製品では、漆塗り椀・曲物・底板・斎串などがある。

遺跡の性格を示す遺物には、木簡のほかには石帯二点、布目瓦二点がある。石帯は丸軀で、縁辺部に漆を施した烏油腰帯と呼称される

ものである。墨書土器は一次調査で七六点出土し、二次調査での出土点数を合わせると一〇〇点をこえる出土量である。墨書銘には、「豊」「万」「刀」「西」「仁」「新」「大」「中」「養」「真」「菜」等があり、判読できない墨書もある。ほとんどが習書と考えられるが、「菜」と墨書された書体については、今後の資料増加と、書体の検討が課題になる。その他の遺物には土鍬三点、砥石五点、リング状を呈した土製品、石製支脚の他、永楽通宝・洪武通宝・皇宋通宝等の古銭が出土したが、後世による混入と考えられる。

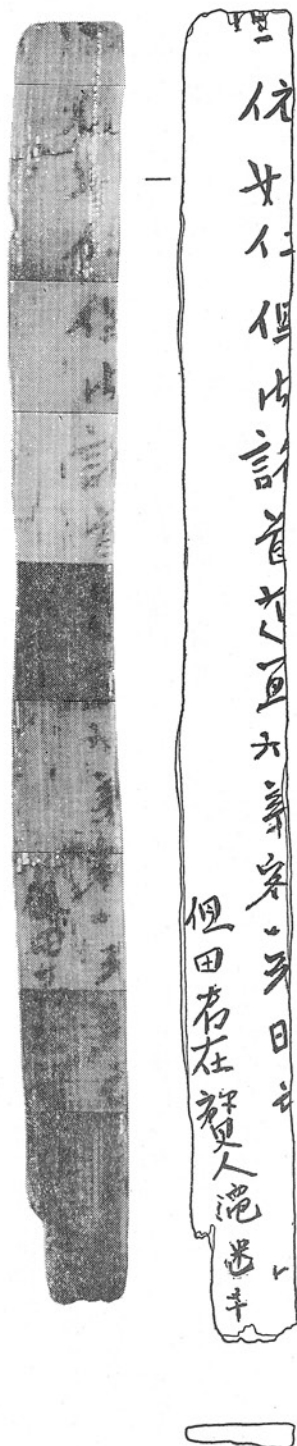
木簡が出土した遺構は、板材列南西角より東辺中央部にかけて、幅一・五m～二・五m、深さ三〇～四五cmを測る溝状遺構である。

## 8 木簡の积文・内容

- (1) ☐ 依如件但 ☐ 〔御カ〕 ☐ 〔道カ〕 ☐ 〔以カ〕

但田者在贅人繩継 ☐

(35.5) × (2.9) × 6 081



(1)は板材列で囲まれた内部に営まれた溝状遺構の底面より検出され、多量の土器と共に出土したものである。贅人繩継が前段の文を報告したものであろうが、墨痕が不明確な文字が多く、木簡のもつ意味は判然としない。

本遺跡の成立時期は九世紀後半頃に考えられ、木簡・石帯などに示されるような官衙の性格は一〇世紀代に入ってからのものである。しかし多量の墨書土器や布目瓦の出土、さらに須恵器の底面や高台部を利用した転用硯などからは本遺跡の多様な性格をうかがうことができる。詳細な検討は今後に残るが、一〇世紀代の遺物がかんりの量で出土している点も含めて遺跡の性格を推し測る上で注目したい。

## 9 関係文献

山形県教育委員会『熊野田遺跡発掘調査報告書』(一九八七年)  
同『熊野田遺跡第三次調査説明資料』(一九八八年)

(野尻 侃)